

## 一橋のなかの中国と中国語

鈴木将久

私は大学の授業および研究について、「文化資源」という角度からお話ししたいと思います。私のいわゆる専門は中国文学研究で、大学では中国語を教えていますので、以下では、中国研究と中国語教育についての話になります。

大学で外国語を学ぶことは、現在の感覚では当たり前かも知れませんが、ところが戦前の日本の大学では、西洋の言葉だけが、学問の外国語とされていました。英語、ドイツ語およびフランス語です。戦前に高等教育機関で中国語教育を広げようと努力した倉石武四郎氏は、『支那語教育の理論と実際』（一九四一年）に、こう書いています。「大学における支那語の地位も、最近までは微々たるもので、外国語といえ、イギリス・ドイツ・フランスに限られ、京都帝国大学では、支那学を専攻する

ものでも、欧州語を二単位必修する義務があるのに、欧州語学を専攻するものもとより、国語国文学を専攻するものでも、支那語を収める義務はなかった。「支那語」というのは戦前の言い方です。現在では「支那」という言い方は戦前の中国差別が色濃くまとわりついていますので使いません。ここでは歴史的用語として使いました。

倉石氏によると、中国のことを研究する学生も、中国語を学ばなかったと言います。それが可能になったのは、日本に「漢文訓読」という方法があったからです。漢文についての詳しい説明は省きますが、簡単に言うと、古代中国の言葉を日本風にして読み、理解する方法でした。漢文さえ学べば、同時代の中国語を習得しなくても、中国についての研究ができることとされて

いたのです。もちろんそのような見方の背景には、同時代の中国への蔑視がありました。そうした学問のあり方を批判して、倉石氏をはじめとする何人かの人びとは、同時代の中国で話されている言葉を学ぶことを主張したのでした。

一橋大学でも、事情は似たようなものでした。一橋大学の前身である東京商科大学ではじめて中国語が設置されたのは、私が調べたかぎりでは、一九三七年です。初級から学ぶ「支那語」と、中級にあたる「読方、訳解、作文」という授業がおかれました。一九三七年というのは、おそらく偶然だと思えますが、日中戦争が始まった年です。意識的ではないと思うものの、戦争によって中国に進出するときに、中国語が必要とされたということになります。

じつは東京商科大学でも、それ以前から中国に関する授業はありました。これから紹介する根岸佶氏の授業です。たとえば彼は、「満蒙事情」という授業を持っていました。日本からの開拓団が出かけた満州と蒙古のことです。商科大学ですから、満州や蒙古に商業活動のために出かける人がたくさんいます。そのような需要に応えるように、「満蒙」のことを説明する授業があったのです。

つまり、戦前の日本の高等教育において、同時代の中国語や中国研究は、学問としては認められませんでした。一橋でも、

戦争や商業活動の必要の範囲内においてのみ、授業がおかれていました。ところが、面白いことに、一橋では、学問ではないとされたことを逆手にとるように、中国に対する独特な研究が生まれました。それは中国の庶民の生活の論理にまなざしを向ける研究でした。

ここで根岸佶氏（一八七四～一九七一）の主たる研究を紹介したいと思います。彼は中国経済の研究者でした。代表的な著作として『中国のギルド』（一九五三年）という本があります。ギルドというのは中世西洋で生まれた同業者団体のことですが、この研究は西洋のギルドの概念で中国の経済活動を解説したものではありません。そうではなく、中国社会に特有な人間関係のあり方、いかなれば、中国の人がどのようにして他人との関係を組み立てるかを、できる限り内在的に理解しようとしたものです。例えば次の文を見てみましょう。「人民は国家に依存することなく協同自治により生活することを図った。彼等の生活を見るに三様式あって、一は家族、二は郷党、三はギルドである。往時彼等はその家族が繁栄し、郷党が平和で、ギルドが安固であって、生を楽み、死を厚うし得ればそれで満足した」。おそらく現在の中国社会を見るにも有益な指摘であるように思われます。

根岸氏は、先ほど述べたように、戦前は国策とも衝突しない

授業を持っていました。そのような授業をしながら、同時にギルドについての研究を深め、戦後すぐに著作としてまとめたのでした。それは高尚な学問ではないかもしれませんが、一橋のなかでも主流を占めたとは言えないかもしれませんが、しかし、商業活動の必要という枠を踏まえた上で、それを近視眼的な利益に陥らせず、むしろ中国社会の実態に即した研究へと深めることに成功しています。

根岸氏の学問的な伝統、あるいは中国に向き合う姿勢のようなものといった方が良いかもしれませんが、それは一橋で脈々と受け継がれました。根岸氏の弟子にあたる歴史学者の村松祐次氏（一九一〇～一九七四）のほか、西洋史出身ながら根岸氏以来の中国経済研究を進めた増淵龍夫氏（一九一六～一九八三）、独特な思想的構想力によって近代中国思想を鋭く論じた西順蔵氏（一九一四～一九八四）、魯迅・周作人をはじめとす

る現代中国文学の流れを大きな視点から論じた文学史家の木山英雄（一九三四年生まれ）など、多彩な研究が知られます。いずれも、大きな特徴としては、中国人の生活の息吹をくみ取るうとする研究であったと思います。それは、師匠から弟子へと伝わってきたものであり、同時に、一橋のキャンパスの雰囲気から導かれたものでもありました。あまり華やかではありませんが、豊かな「文化資源」と言えるのではないのでしょうか。

興味深いことに、近年、日本のみならず中国でも、一橋の中国研究の資源が見直されています。たとえば木山英雄氏の著作が中国語に翻訳されて話題になったり、増淵龍夫氏についてのシンポジウムが開かれたりしています。現在の中国に生きる人にとっても、中国人の庶民の生活を、明確な言葉にして論じる研究が、新鮮で重要なものと感じられているのです。

（すずき まさひさ／言語社会研究科教授）